

# 職人の技

シリーズ 35 〈いす張り〉

柴田 葉月 さん

日本では、なじみの薄いいす張り職人という仕事。若き職人は、夏の明るい日差しのようなカラツとした笑顔で、シンプルに説明する。

「その物が、高いとか安いとかではなく、愛着のあるものを未永く使っていたり、お手伝い。それがわたしの仕事です」

いす張りは、でき上がったいすやソファのフレームにスプリングやクッション材など詰め物をし、布や革を張り仕上げる、という技能。

日本では明治時代、それまで馬具を手掛けていた職人たちを中心に始まったといわれている。現在では国家検定として「家具製作（いす張り作業）技能士」の資格があり、柴田さんもこの資格を保有している。

「お客様は60歳代の方が多いですね。先日は金婚式を迎えたお客様。ダイニング・セットの6脚のうち、5脚はもうなくなっていて、1脚だけ物置に眠っていたといういすを張り替えました。どうしても残しておきたかった：という思いがあったようです」

高度経済成長。がむしゃらになって働いた。家族とのだらんの場所にそのいすがあった。50年を共に歩んだいすに、あのころの思いを込めて。「フレームはちゃんとしているのに、捨ててしまふのはもったいない、と思うんです。それにポンポン買い替えていたらいい木もどんどんなくなっちゃう。エコ、と言う気はありませんけど、ちゃんとした木で作られたものなら、お客様と一緒に大切に残しておきたい。そういう気持ちもあります」

木枠などのフレームは丈夫で何年も持つけれど、体と直接触れる革や生地の部分はどうしても消耗が激しくなる。長く使える良いものを、張り替えによつてさらに長く使えるものにする。

振り返れば「モノ」を大事にする子どもだった。伝統的な工芸品が好きだった。「おばあちゃんが持っていた茶たんすやちゃぶ台が妙に好

きたつたんです。そのころから職人や伝統工芸にかかわる仕事には興味を持っていました」

その夢を果たすべく、高校は都立工芸高校に進み、大学ではプロダクト・デザインを専攻。

「でも、机の前に座っていて何もアイデアが浮かばないんです。体を動かして、『モノ』を作っている方が性にあっているので、デザイナーの道はさつさとあきらめました(笑)」

デザインよりも直接的に「モノ」に触れる仕事。「モノづくり」の会社の門を叩き、大学を出てすぐに師匠の元で研さんを積む。そこで縁あつて

## 愛着がわいたモノ。それこそが貴重品。

「貴重」という単語は、高価なアンティークだけに用いられるべき単語ではない。柴田さんが作成したダイレクトメールにはこんな言葉がつけられている。「ずっと愛用してきたソファ、



文=岩瀬 大二  
text: Dajji Iwase

写真=岡本 成生  
photo: Masao Okamoto



いろんな思い出が詰まった食卓の椅子、日本中を走り回ったバイクのシート。みなさまの大切な椅子を、もつと永く使い続けてもらうために…」

たとえ高価でなくても、25年、50年という時間を一緒に過ごしてきたいすは、自分にとっ

ては博物館の展示品よりも大切な「貴重品」。あのときの苦勞、喜び、子どもの巣立ち、もしかしたら大切な人との離別と新たな人生の出発。値段ではない。その思いを新しい喜びとともに引き継いでいく。

『モノがいい』とかつてよく言うじゃないですか。技術とか素材が良いものはもちろん、愛着がわいた『モノ』。それもいい『モノ』だと思っんです」

柴田さんが張り替えていくのは、生地だけでは、ない。そこから新しいストーリーが始まっていく。

『モノがいい』とかつてよく



## PROFILE

しばた・はづき  
都立工芸高校デザイン科、明星大学造形芸術学科プロダクトデザインコース卒業後、有限会社工業に入社し、いす張りの道に入る。2007年、いす張り職人として独立。2度のオーストラリアのフリードリッヒ・オット！コミュニティ社での研修を経て、2010年、有限会社工業からのれん分けという形で、東京町田市にて自らの工房「工業町田」設立。国家検定家具製作（いす張り作業）技能士第072-124-13-0035号。